主不在の研究室

鳥越輝昭

松山先生は、ごく稀に個人研究室にいらっしゃることがあった。先生は、捜し物の最中である。もちろん、捜し物は出てこないのである。

松山研究室は、十数年前に入室したときに運びこまれた大量の本や書類の上や脇に、その後の本や書類が、整理も処分もされぬまま、積み重なった場所だった。その様子は、ゴミ捨て場に似ていた。

一度、お住まいのマンションを訪ねたことがある。室内の状態は個人研究室と同様だった。そこもまた、掃除や整理とは、およそ無縁の場所だった。

個人研究室が校務をおこなうのに不適な場所になっていたから、先生がそれをおこなったのは、もっぱら英語部会の共同研究室である。共同研究室にはいると、ビデオの編集作業のために、テレビを付けっぱなしにして、ワープロを打つ先生の姿があった。四角いがっしりした肩の上に、四角い顔が乗り、そこに四角い眼鏡が掛けられてい

て、そのなかで大きな目が光っている。あるいはまた、先生は不在で、テレビが鳴り、打ち掛けのワープロが置かれ、周囲に書類が散乱し、大きな黒いバッグが脇に置かれていることもあった。

ビデオを編集するのは、授業やゼミの指導のためだった。先生は、学生の指導に熱心だったのである。ワープロを打つのは英語部会の事務文書作りのためが多かった。先生は、英語部会の創設時から、部会のために尽くされたのである。

大きなバッグは、それを背負って、さまざまな場所に出かけるためのものだった。横浜、東京の各所は言うにおよばず、日本の津々浦々から、イギリス、アメリカ、フランス、イタリアと背負われてゆくバッグである。

ご自宅に電話をすると、ほぼ例外なく、やや甲高い声の留守番電話が答えた。ちょうど、個人研究室が仕事の場でありえなかったように、ご自宅も仕事の場でありえなかったのだろう。あのときも、先生は、黒いバッグを背負って、小走りにどこかを移動されていたのだろうか。

小走り……、そう。先生は、知性も、言語も、身体も軽快である。軽快な知性は、素早く広範に、新しい知識と情報を吸収する。浅草生まれの東京弁は、早口に、話題から話題に飛び移っていく。数名で歩くと、年長の先生がいつも先頭にいて、案内役になっている。

軽快にいつも動いているためには、吸収し終えた本や書類に構っている暇はない、ということなのだろう。松山研究室と、住まいのマンションは、それゆえのゴミ捨て場だった。